

2022. 4. 10. 主日礼拝説教
聖書：マルコによる福音書11章1～11節
『主がお入り用なのです』

夏目漱石の「こころ」に登場する主人公の「先生」は、若い時に下宿の娘に恋をします。ところが親友もその娘を恋していることを知るや、その先生は策略を用いて娘との結婚の約束を取り付けてしまいます。その結果、親友は「おめでとう」と言い残して自殺してしまいます。

先生は思いを果たしてその娘と結婚できますが、少しの喜びもなく、心が落ち込むのです。なんとか頑張ろうとすると、不思議な力が彼の前に立ちはだかって「おまえは何をする資格もない男だ」と言います。「どうして人の邪魔ばかりするのだ」と怒鳴ると、「自分でよく知っているくせに」と言います。それを聞くとまたぐったりしてしまうのです。

自分の思いを無理矢理果たしたけれども、そこには喜びはありませんでした。私たちも生き生きと喜びに溢れて生きたいと思うならば、自分の思い通りを全うしようとするのではなく、神の前に潔く使命感に溢れた生き方をすべきなのではないでしょうか。

本日の聖書の箇所は、主イエスが十字架に架けられるためにエルサレムに上って行かれるという記事です。その時、主イエスを迎えた群衆は貧しい人々でした。後に権力者と一緒になってイエスを十字架に追いやった群衆と区別してよいと思います。貧しい彼らにとって、無一文の姿でロバの子に乗って来られた主イエスは、自分の唯一の財産であるような上着でさえ持つことから活用することへと導く解放者であったということでしょう。ところが、ユダヤ教当局や高い地位にある人々にとっては大切な過越の祭りを台無しにする闖入者でしかありませんでした。そこで彼らは「一体これはどういう人だ」(マタイ21;10)と驚いたり、「お弟子たちを叱って下さい」(ルカ19;39)と言ったりして、この騒ぎを押さえ込もうとしました。

しかしベタニア村では、ひとりの人が弟子たちから子ロバを貸して欲しいと頼まれた時に、「主がお入り用なのです」という一言で突然起こった出来事に従っています。彼にもその日の予定や計画があつたに違いありません。しかし「主のご用」の一語の前に、自分のすべての言い分も計画も後ろに引き下げ

ているのです。そのことによって歴史に残る主イエスのエルサレム入城に参加する一人とされたのです。

その人にしてみれば、なぜ自分の子ロバが必要なのかよく知らなかったと思います。

先週はこの礼拝でオルガニストの任職式がありました。教会で何らかの役割を担ったりすると「なぜわたしが」と嘆いてしまう方もおられるのではないのでしょうか。「いつも忙しいのに苦勞ばかり」と毒づいてしまうのです。しかし、主イエスの召しとは自分の思いをまっとうするための補助的な道具ではないはず

です。たとえ人々が知らなくとも、すべてのことを知っておられる主イエスがおられる限り、私たちは誰ひとりとして無意味な仕事に駆り出されることはないのです。

それゆえ私たちは恐れずに「主がお入り用なのです」と確信させられることにのみ従ってゆけばよいのです。

自分は「主のご用」なんかに関係ない人間だという生き方をしている人々にも主イエスの側から「あなたが必要なのです」と招かれているのです。